

第6章

鹿児島県における学校を拠点とした 男女共同参画の学びの展開 子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業

高崎 恵

1 はじめに

鹿児島県では2013年策定「第2次鹿児島県男女共同参画基本計画」から、緊要な課題解決に向けて重点的、集中的、部局横断的に推進すべき取組を「戦略的取組」と位置づけ、その1番目に「子どもの頃から男女共同参画の理解を深めるための教育現場における取組の推進」を掲げ、その中核的取組として「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」（以下、本事業）を実施している。

この取組は2011年に実施した「鹿児島の男女の意識に関する調査」において「男女共同参画社会を形成していくために県が力を入れるべきこと」に、「子どもの頃から、男女の平等や相互の理解・協力についての学習を充実させる」と回答した人の割合が49.4%と最も高かったことを根拠としているが、直近の2016年度調査においても同様の結果であり、男女共同参画推進に関する県の施策について、子どもを対象とする取組に寄せる人々の期待が変わらず大きいことがうかがえる。

本稿では、鹿児島県における男女共同参画推進に関する課題を踏まえて本事業立案に至った背景と、子どもを中心に学校を学びの場として男女共同参

画教育を進めることの意義について述べる。

2 本事業の枠組

本事業の趣旨について

本事業は、「子どもの頃から男女共同参画の理解を深めるために、学校における男女共同参画に関する学習の充実を図る」という趣旨を前提に立案された。学校における男女共同参画に関する学習は、発達段階に応じ、関連の教科を中心に学校教育全体を通じて行われており、特に、人権教育が、その役割を担っているが、本事業の立案当時、その担い手である教職員が男女共同参画について学ぶ機会は少なかった。このような状況を踏まえ、趣旨に基づく実施内容の立案にあたって、人権と男女共同参画に関する学びの不可分な関係を考慮し相互連携的に子どもたちの男女共同参画に関する学びを深める以下の基本的方向が確認された。

子どもたちの男女共同参画に関する学びを深める実施内容の基本的方向

- ① 子どもたちの人権の当事者性が培われるよう、すべての子どもが当事者であり身近な人権である男女共同参画の大切さについての実感的気づきを促す。
- ② 将来を見据えた自己形成の基盤である自己尊重に基づく自己肯定感に影響を及ぼし、子どもたちが本来有している多様な選択の可能性の障壁となる性別に対する偏見についての実感的気づきを促す。
- ③ ①②の実感的気づきを促すために参加・体験型の学習法であるワークショップによる実施とする。
- ④ 本事業の実施により、教職員の男女共同参画に関する正しい理解の浸透と実践的スキルの向上を図る学習の機会を提供する。
- ⑤ 学校を拠点に子ども、教職員、保護者・地域の人々を対象とする一体的な取組の展開を基本とする。

学校を拠点とする実施校区地域の一体的な取組について

基本的方向⑤には、全国に比べ固定的性別役割分担意識の改善が遅々として進まない等事業立案時の男女共同参画の状況に、男女共同参画について子どもたちが学ぶだけでは不十分で、教職員、保護者や地域の人々が共に学ばなければ、家庭や地域を通じてジェンダーは再生産され続けるという問題意識があった。

特に、地域は、学校や家庭と共に子どもたちを育み、子どもたちの豊かな活動の場としての機能を担い、子どもに関わる様々な活動が大人たちによって取り組まれている。一方、地域には、男女共同参画の視点から見直されるべき様々な慣行があり、これらの活動が及ぼす子どもたちへの影響が心配される。そのため、男女共同参画についての学びを地域的広がりの中で共有することが重要であるという認識を踏まえ、本事業の対象に地域の人々を含めることとした。

また、学校を拠点とする実施校区地域の一体的な取組を本事業の基本とすることについては、男女共同参画推進上の課題である「市町村における取組の格差」の観点からも要請された。

鹿児島県においては、2008年度に県や市町村と協働して地域の実情や特性を踏まえて活動する「男女共同参画地域推進員」を設置し、一人ひとりにより身近な地域での取組の充実を図ることを啓発の在り方の柱石としてきたが、その中核であるべき市町村行政における取組状況の格差は、徐々に縮小されてきているものの現在も存在している。

また、市町村における男女共同参画担当部署と、啓発の基盤を成す男女共同参画に関する教育・学習の中核的役割が期待される学校・教育委員会との連携は十分に図られておらず、その調整の困難に悩んでいる担当者も少なかった。

本事業には、このような市町村の状況を踏まえ、学校を中心に市町村の小・中学校区・中学校区といった身近な地域において男女共同参画の学びの輪が広がってほしいという願いも込められている。

Ⅱ 実践の展開

実施体制について

事業の効果的な実施に向けては県と実施校のみで一体的な取組の展開の充実を図ることは難しいことが予測されたため、前述した市町村の状況も踏まえ、市町村の男女共同参画担当係、教育委員会、鹿児島県男女共同参画地域推進員との連携による実施体制での取組を促す関係者への働きかけを行うこととした。

また、「一体的な取組の展開」の充実を実施校選考時の重要な基準としているため、本事業の実施を通して、市町村における男女共同参画推進に重要である教育委員会との連携も徐々に図られるようになった。

表1 「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」選考基準

「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」選考基準 (①②③は必須事項)	
①	学校・家庭・地域が一体となって取り組む内容となっている。
②	全校児童・生徒又は一学年児童・生徒を対象とするなど、学校全体で取り組む内容となっている。
③	事業取組を契機とし、事業後も家庭や地域と連携して取り組む意向がある。
④	市町村全体で取り組む意向がある。 (例)・市町村内の他校教職員等教育関係者の事業参観を計画する。 ・事業を実施する学校をモデル校と位置づけ、今後の推進の拠点とする。
⑤	学校の規模や小・中学校のバランス、過去の実施状況も含めた地域間のバランスなどを勘案する。

(2020年7月31日現在)



3 実施状況

2019年度までの7年間で県内73校の小中学校（小学校52校、中学校19校、小中併設校2校）で実施し、これまでの参加者は10,201人。

事業初年度の2013年度は7校から応募がありすべての学校において実施できたが、応募校数は年々増加傾向にあり2020年度は初年度の5倍を超える36校からの応募があった。例年、予算の関係で10校程度の選定となるため、2020年度の実施予定校は、小中合同開催や小規模校近隣3校合同実施など地域内での連携した取組としての応募もあり、14校とこれまでで最多となっているが、実際は11校での実施となる。

選考からもれた学校に対しては市町村が実施する出前講座の活用を働きかける等、県と市町村の連携した取組により学びの機会の確保に努めるとともに、実施校以外の教職員や教職員を目指す学生等を対象に男女共同参画の学びをワークショップで実施するためのプログラムも本事業の一環として展開し、より多くの子どもたちに男女共同参画の学びが届くよう工夫も講じてきた。

2020年度実施校には未実施市町村に所在する7校が含まれ今年度終了時点で未実施市町村は3町村を残すのみとなる。

4 実施内容

本事業では、児童生徒と保護者・地域の人々を対象とする学びを、小学校1年生から高齢者まで同じ内容のワークショップで実施している。

一方、教職員研修では、児童生徒のワークショップを参観したうえで、実施したワークショップデザインとその意図を解説している。

児童生徒と保護者・地域の人々を対象に実施する ワークショップの具体例

ワークショップの目的

- ・子どもたちが、自分たちの絵から性別にかかわらず一人ひとりちがっていて、多様な存在であることに気づくこと。
- ・子どもたちが、性別にかかわりなく人それぞれに個性や能力があることに気づくこと。
- ・子どもたちが、自分を大切に、他者も大切にするアサーティブ・コミュニケーションの代表的なスキルである「Iメッセージ」を知ること。

この3つの目的の達成を目指してデザインしたワークショップについて、以下、実際の流れにそって実施するアクティビティ等を紹介し、その意図を述べる。

導入 アイスブレイク「利き手でない手で名前かき」

このワークショップで参加者が使用する物は紙と筆記用具のみ。配布したA4の白紙に普段字を書かない方の手で記名し、書いてみた感想をペアで話し発表してもらう。

隣の人と見せ合って楽しく話す参加者も発表の場面では躊躇する。それはなぜか、ここからの学びへの意味づけとして、私たちが「ちがいが」を恐れて発表しないでいること、これまでの発表や発言等の場面で「ちがいが」を叱られたり笑われたり、からかわれたりした経験を通して「ちがいが」を恐れるようになったことを話したうえで、①「ちがいが」は「まちがいが」ではないことを共有する場面になっている。併せて、②初めてや慣れていないことに取り組むことの難しさを実感したうえで、日頃、初めてや慣れていないことに失敗した自分や他者にどのような眼差しを向け、声かけをしているか振り返る場面にもしている。

参加者とこの2点を共有することでワークショップへの主体的な参加が深まることを期待して実施するアイスブレイク。

展開1 「シジエカキ」

「しゃべらない」「のぞかない」という2つのルールのもと6個の指示で絵を描くアクティビティ。

2つのルールを守れるよう、安心して取り組める居場所に移動することを勧めるが、これはワークショップが大切にしている「すみっことはらっぱ」の考え方に基づいている。

みんなで一緒に一斉に、かつ仲良くという集団活動が多い学校において、1人で行うことはネガティブに捉えられがちだが「はらっぱ」で発信する勇氣は「すみっこ」で自分を見つめる時間があって形成される。自分への信頼を深めるための「すみっこ」での熟考を経て「はらっぱ」で活動する経験を重ねることは、特に子どもたちの自己形成にとって重要であり、このアクティビティを「すみっこ」の時間と位置づけて1人で考えて描くことをポイントに実施している。

さらに、このシジエカキで設けている2つのルールは、毎日毎時間子どもたちが教室の中で守っているもので初めてや慣れていないことにあたる時、確認できないことは難しいことを体験し、ルールを守ろうと努めている日々がどんなに大変で素晴らしいことかを伝えている。

この部分で、保護者・地域の人々に対しては、子どもたちが初めてや慣れていないことに出会い続ける日々を送っていること、その中で尋ねたい気持ちや友だちと話したくなる気持ちを抑えてルールを守り、教職員と共に授業を創りあげている存在であることを話したうえで、成績等の結果のみを褒めるのではなく、子どもたちの日々のありのままの姿を認めることの大切さについて共有することを通して、自己肯定感を育む学校、家庭、地域の在り方に思いを深める場面になるよう意識している。

展開2 話し合いの約束「Iメッセージ」の共有

展開1でそれぞれが1人で描いた絵をもとに話し合いを実施する前に、話し合いの約束を共有するミニレクチャーの時間を設けている。

「話し合いは好きですか?」「話し合いではいろいろな意見が出て、誰もが

発言しやすいですか？」など問いかけて、自分と他者の意見に「ちがいが」がある時、それぞれの間にある「ちがいが」を尊重できずに自分の意見を言えないことや、他者の意見を攻撃してしまいがちなこれまでの話し合いにおける態度を振り返ったうえで、自分の意見も他者の意見も尊重できる話し合いのスキルとして「Iメッセージ」について説明している。

展開3 グループ分けのゲーム

話し合いのためのグループづくりをゲームと名付けて実施している。

目を閉じている子どもたちの背中に同じ直径の丸い5色のシールを貼り、しゃべらず、背中を見たり触れたりせず印が同じ人同士でグループづくりをするゲーム。

日頃、言葉で伝える私たちが、ジェスチャーや筆談等別の方法を思いつき行動できたことを認めたくえて、印に色以外の特徴はなかったかを尋ねると「カタチは同じ丸だった」「シールだった」という気づきが引き出される。このグループ分けは、目立ちやすい色に注目し過ぎて、それ以外を見ようとしなかったことを実感するために実施している。

この体験から、私たちの社会では、目立ちやすい属性（性別、年齢、障がいの有無、国籍等）によって様々な判断を下し役割を固定化する傾向があることを共有したうえで、固定的性別役割分担意識等男女共同参画に関する知識を提供している。

展開4 話し合い

グループに分かれて「絵を描いている時の気持ち」「絵を見せ合った感想」について話し合う。話し合いの後半、発表会に向けて代表を決める際、「6年の男子が発表してよ」等、属性によって役割分担をしてしまいがちなこと、代表は一人という思い込みがあることを指摘し、発表者を決める話し合いも「Iメッセージ」で行うことを提案している。

振り返り 発表会




発表会の前に、代表1人が発表し他大勢が聴いている場が発表会であることを確認したうえで、発表者1人の勇気に頼りすぎることなく、代表で発表

Ⅱ 実践の展開

してくれることに感謝し、最後まで発表をしっかりと聴く態度でここに居る全員で発表しやすい場をつくることの重要性を共有している。

また、子どもたちの発表内容を繰り返し、男女共同参画や多様性の視座からリフレイムしてコメントすることで、自分たちの言葉で男女共同参画を理解できるよう努めている。

表2 ワークショップにおける活動の流れ

主 な 活 動	
開会5分（学校による進行～校長あいさつ等）	
導 入 (15分)	<p>アイスブレイク「利き手でない手で名前かき」</p> 
展 開 (小学校55分・中学校60分)	<p>① シジエカキ (15分) ② 話合いの約束「Iメッセージ」の共有（小学生10分・中学生15分） ③ グループ分け（20分） ④ 話し合い（10分）</p> <p>(休憩 10分)</p> 
振り返り (小学校10分・中学校15分)	<p>発表会</p> 
閉会5分（学校による進行～児童生徒あいさつ等）	

教職員対象の研修の具体

本事業のワークショップについて、どのような目的を立て、それを達成するためにどのようにデザインしたか、また男女共同参画や人権についての学びをワークショップで展開する意義について、児童生徒のワークショップを参観したうえで、実施したワークショップのデザインと、その意図を解説することを通して男女共同参画とワークショップについての理解を深める研修を実施している。

以下、ワークショップの内容やその意図については前節で触れている部分と重なるため、教職員対象に解説した部分を中心に述べる。

(1) 実施したワークショップのデザインについて解説

まず、目的の共有からは始めているが、ワークショップは、学習者を主体にデザインする学びであり、目的の主語は「参加者」「子どもたち」で立てる。これはワークショップが参加者自らの「気づき」を大切にする学びであり、ファシリテーターが「教えない勇気」をもってそこに在ることを意識するためでもある。

次に、このワークショップのフレームワーク①「気づき＝みんなちがう」、②「スキル＝Iメッセージ」、③「知識＝男女共同参画社会について」を共有し、この3点が提供されることにより変化への意欲が引き出されることを解説したうえで、短い時間での十分な知識提供は難しく、また、繰り返し学び続けることが重要であるため各教科や学校生活における様々な場面を捉えて知識と結びつけることを教職員にお願いしている。そのため、意識調査や賃金格差等男女共同参画に関する各種データ等の参考資料も県から提供している。

以下、ワークショップの流れにそって、教職員研修で解説している内容について述べる。

導入 アイスブレイク「利き手でない手で名前かき」

- ・私たち大人が初めてや慣れていないことが少なくなる中で、その難しさに改めて気づき、どのような配慮があれば子どもたちが「またやってみ

よう」と思えるか考えることが大切であること。

- ・アイスブレイクは緊張をほぐすために実施するもので、新しい知識との出会いを豊かに結ぶためのストレッチとして導入の際に重要な役割を果たすが、教職員と子ども達のように日頃から関わりが深く信頼がある関係では不要な場面が多い。難しいテーマでの話し合いや新しい单元への導入として必要がある場合には実施し、導入だけが楽しい経験として残ることのないよう本題との丁寧な意味づけのもと誰もが取組やすい内容で実施すること。

展開1 シジエカキ

- ・指示が伝わらないことで苛立つ場面は多いが、人によって捉え方はそれぞれであることを自覚していれば、確認しながら指示を出すようになり、的確に伝えられること。
- ・一方で、学校では指示を事細かに出しすぎる傾向があり、子どもたちの思考停止が見受けられる。実施内容に合わせて指示の最適化を図ることにより、子どもたちの自分で考え行動する力が引き出されること。
- ・ルールにより確認できずに描いた絵により子どもたちは一人ひとりに「ちがいが」あることを実感する。学校における活動は「ちがいが」がネガティブに捉えられる場面が多いが、これからの社会では「ちがいが」を豊かに受け容れ、「ちがいが」を重ねて新たな価値を創り出すマインドの醸成が重要であること。

展開2 話し合いの約束「Iメッセージ」の共有

- ・「早く〇〇しなさい」等、理由を伝えず命令している場面は多いが、命令が繰り返されると自ら考え行動することは難しくなる。「Iメッセージ」で、早くして欲しい理由を伝え、パワーでコントロールするのではなく、エネルギーをかけ意味を共有することが重要であること。
- ・予測不可能な時代を生きる子どもたちにとって「ちがいが」を重ねて新たな価値を創り上げる対話力は必要不可欠であること。
- ・一人ひとりに「ちがいが」があるからこそ尊いという人権感覚を育み、知

恵も力も関わりの中で生まれることを実感的に理解できる機会を増やし、対話することの豊かさを子どもたちと共有していくことは、子どもたち一人ひとりの豊かな人生を切り拓くと共に多様性に富んだ活力ある社会づくりの鍵となること。

展開3 グループ分けのゲーム

- ・「しゃべらない」というルールにより、立ち上がっていいのか尋ねることができず座ったまま戸惑っている子どもたちは多い。学校には許可がなければ動けない、動かないという許認可の関係性が見られること。

展開4 話し合い

- ・話し合う項目2つを示してはじめるが、自分たちが描いた絵が話し合いの素材となることで話し合いへの主体的な参加により提示する2つの項目以外にもいろんな話題を自らで立てられることを期待していること。
- ・絵を見せ合った時の子どもたちのざわめきが「ちがい」を自覚した瞬間であり、子どもたちが「ちがい」を尊重するために「Iメッセージ」で話しながら共感関係を深めていたこと。同感を強いてきたこれまでの社会から、共感をひろげていくこれからの社会へ、その転換にあたり対話する力が大切であること。

展開5 発表会

- ・発表者の言葉を繰り返し、男女共同参画、多様性の視座からリフレイムしてコメントすることで、自分たちの気づきを基盤に人権・男女共同参画についての知識を得て理解が深まること。それにより人権の当事者意識が育まれることを期待していること。

(2) 参観し気づいた子どもたちの様子について話し合い

教職員は、子どもたちの様子に自身の日頃の指導方法を照らして考えながら参観している。以下、教職員が話し合い、発表した内容の一部を紹介する。

- ・いつもは発表したり、積極的に動いたりしない子どもが発表していた。
- ・発表の仕方も自分たちで考えていた。私がどう発表するかを指示することで、自分たちで決める力を奪っていたことに気づいた。

Ⅱ 実践の展開

- ・グループづくりで同じグループの円の中で男女がきっぱり分かれて座っていた。日頃から学校の中ではいろんなことが男女別。意識して混ざるようにしないと分かれることが当然となり、そのことが将来に影響を与えるかもしれないと思った。
- ・発表すると手を挙げたもののなかなか言葉が出て来ない子のことを他の子が急かすことなく待ってくれていた。それはファシリテーターが待っていてくれたからで、自分だったら「はい、ほか分かる人」と言ってしまふなと反省した。

この話し合いの場面では、固定的な関係性が解かれた場面があったことに気づく発言が多い。学校では教職員と子ども、学年、男女等、属性による関係性の固定化が見受けられるが、それを見直すことで、一人ひとりの性別等の属性に関わらない個性や能力を開花させていくことが教育には求められている。

自身のこれまでを振り返りながら参観する教職員の気づきは深く、子どもたちへの働きかけを人権・男女共同参画の視点で見直そうという姿勢がうかがえる。

本事業を実施できる学校は限られているため、参加校の教職員が男女共同参画の学びを子どもたちと共有し続けてくれることを願って教職員研修を実施している。

5 実施後の感想

本事業実施後、寄せられた感想を対象ごとに紹介する。

児童生徒

- ・「ほかの学年の人や3年生の男子ともなかよくしたいな」と思いました。わたしは女の子だから、3年生の女の子とだけ遊ぶ。そんなふうに遊ぶ人が決まっていたからです。もっといろんな人となかよくしたいです。
(小学生)

- ・私は学習を終えて「一人ひとりのちがいを大切にしないといけないんだなあ」と思いました。一人ひとりの意見が宝物で、意見がちがうのはあたりまえだということを初めて知りました。私は「あなたメッセージ」ではなしていたこともあります。「あなたメッセージ」で相手をきずつけていたかもしれないと思うと、胸がいたいです。後かいしています。これからは、「わたしメッセージ」で話し、一人ひとりの意見を大切にしていきたいです。今日学んだことを、時々思い出したいです。(小学生)
- ・グループのみんなで絵を見せ合いました。自分と違う人がたくさんいました。恥ずかしくて紙を折り畳んでしまいました。その後最初に聴いたことを思い出して恥ずかしいことじゃない！と自分に言い聞かせ、また紙を開くと、みんなが「わーすごい、上手だね」とほめてくれました。勇気を出してよかったと思えました。「人それぞれ」を大切にしたいと心から思うことができました。(中学生)
- ・性別、年齢によって差別することはいけないと思っていたけど、自分が無意識にしていることに気づきました。気をつけたいです。(中学生)

保護者・地域の人々

- ・私は4月からPTA会長をする予定になっていますが、女性だから女性のくせにという思いがあり、先々不安に感じていました。本日のワークショップに参加し、がんばってみようという気持ちになりました。
- ・私自身も感情的に子どもに対して「ダメでしょ」「静かにしなさい」と命令口調になることが多いので「Iメッセージ」を心がけて過ごしたいと思う。私にも子どもたち一人ひとりにも力があるんだ、それを信じて過ごそうと思うことができた。
- ・これまでの話し合いでは集落の行事はこうあるべきと言う長老達の意見があり、なかなか自分の意見がうまく伝わらないことが多かったです。今日のワークショップを受講して、「わたしメッセージ」でこれからの話し合いに臨んで行きたいと思いました。
- ・子育ての中で「あなたはあなたでいい」と言いながらも「男の子なら女

の子を守らなくては」とプレッシャーをかけていることに気づかされました。

教職員

- ・立场上「男の子だから」「女の子だから」という枠には気をつけてきたつもりでいたが、知らず知らずのうちに囚われていたのかもしれない。「子どもたちは、初めてのことに慣れていないことに挑戦し続ける存在」という言葉が心に残った。否定的な声かけではなく、子どもたちが前向きな気持ちになれるような声かけを心がけていきたい。
- ・教職員として子どもとどう接することが大切か、人権の視点でたくさん考えさせられました。かねて自らの言動を振り返ることにもなりました。特に「男子はこうあるべき」「女子はこうあるべき」とか日常的に男女で分けることは、性別による決めつけにつながりやすいことや、知らず知らずに「男が先、女が後」という意識を植え付けてしまうことなど、納得できました。
- ・「忙しい時」「疲れた時」「余裕がない時」こそ「Iメッセージ」が必要だなどと思うことでした。違いを認めたうえで意見をまとめあげていくスキルを今後教室で私も含めてみんなで練習していきたいと思います。誰もが自分を大切にし、意見を伝えられ、笑顔あふれる学校、地域として活性化につながる第一歩でした。
- ・失敗したくないから発表したくない子どもたちが、最後にはたくさん手をあげるようになって、最後には体育館の中がとても温かい雰囲気になったように感じました。ものの見方を変えることで考え方もよい方に変わって行き、その人をその人として見ることで、その人の良いところをもっとたくさん見つかるような気がします。これからの接し方のよいヒントをもらった気がします。

6 おわりに

国立女性教育会館の研修を通しての広がりや深まりを

ここまで述べてきた鹿児島県「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」は、2015年度国立女性教育会館（以下、NWEC）主催の「地域における男女共同参画推進リーダー研修＜女性関連施設・地方自治体・団体＞」において「学校現場との連携した早期からの男女共同参画教育の取組」というテーマで鹿児島県男女共同参画センター課長による報告の機会を得ている。

鹿児島県では、長年、教育委員会との連携による取組の充実を男女共同参画推進の課題として認識し、県立高校へのお届けセミナーの実施等を通して、学校現場との連携を深めるための教育委員会へのアウトリーチを試みてきた。しかし、より早い段階からの男女共同参画に関する教育の重要性が認識される中、小中学校との連携は、先に述べた市町村の状況もあり、遅々として進まない難題であった。

このような状況は、鹿児島県に限ったことではなかったのだろう。センター課長が報告した後にNWECの職員が鹿児島県を訪れ、本事業を参観してくれたことは、関係者一同の大きな励みとなった。

その翌年2016年度にはNWECにおいて「教職員を対象とした男女共同参画研修」が開催され、研修プログラムの1つに「子どもたちの男女共同参画学びの広場推進事業」のワークショップの体験と解説が組み込まれた。

この研修は現在も「学校における男女共同参画研修」として開催され、私も毎年度参加しているが、男女共同参画の視点での学校教育の展開に向け、男女共同参画の基本を整理したうえで学校における課題が提起され、その解決に向けて考えるプログラム構成により、深くて確かな学びを得られるとともに、私にとっても、全国の学校関係者との情報交換や交流が男女共同参画推進への力を養う場ともなっている。

すべての子どもたちが通う義務教育過程に男女共同参画の視点が貫かれる

Ⅱ 実践の展開

ことで、性別に関わりなく一人ひとりの多様な在り方が尊重されることを通して、子どもたちの自己肯定感を育み、多様な選択を可能にすることは緊要の課題である。

全国の学校において、それぞれの地域の実情に即した男女共同参画教育が実施されること、その情報がNWECに集積され、発信されることを通して、日本全国で男女共同参画に関する確かな教育・学習が行われることを期待している。

引用・参考文献

鹿児島県 2013「第2次鹿児島県男女共同参画基本計画」

鹿児島県 2011「鹿児島の男女の意識に関する調査」

鹿児島県 2016「男女共同参画に関する県民意識調査」

鹿児島県 2013、2014、2015「子どもたちの男女共同参画学びの広場事業報告書」

鹿児島県 2016、2017、2018、2019「子どもたち男女共同参画学びの広場推進事業報告書」

文部科学省 2008「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕」

森田ゆり 2000『多様性トレーニング・ガイド—人権啓発参加型学習の理論と実践』
部落解放人権研究所

荻宿俊文他 2012『ワークショップと学び1 まなびを学ぶ』東京大学出版会

(たかさき・めぐみ オフィスビュア男女共同参画政策アドバイザー)